

---

lily

綺葦

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

lily

### 【コード】

N4103I

### 【作者名】

綺葦

### 【あらすじ】

敵対する次期王と姫の物語

平行線は、交わることを知らない

lily

薄暗い森、

僅かにぬかるんでいる道を踏みしめる

雀の鳴き声が朝霧の中を駆け抜け、朝であることを知らせている

木々の間だから漏れる朝日に目を細めながら、やっとたどり着いた湖を見つめた

ここが、全ての始まりだったんだな

思い出の地を、懐かしみながら見渡す

そこだけ、綺麗に木々が拓けた湖

天から降り注ぐ光が、まるで二人を天へと誘<sup>いそな</sup>っているようだ

男は、横抱きにしている女を穏やかな目で見ると、湖に近づくと

私は今、事切れた愛しい女<sup>ひと</sup>を腕に抱き、深い深い湖の中へと進んでいく

体よりも遥かに冷たい水の中に、震えが止まらない

だが、不思議と恐ろしくはなかった

彼女が腕の中に居るからだろうか

ようやく二人きりになれる……

どれだけこの時を待ちわびたことか

もう二度と、離さない

## 憂鬱

数人の男女が談笑する一室で、一人だけつまらなそうにぼうつとしている男が居る

その男は、美しい顔を歪めるでも緩めるでもなく、無表情だ

そして、完璧に会話に参加していない

窓から入ってくる清々しい風がつやのある黒髪を揺らし、漆黒の瞳は、瞬きもしない

「ルーシュベルト様は、いかがですか」

女性の中の一人が、彼に話しかける

「……………」

無言で、視線も合わせない

「ルーシュベルト様、いかがなさいました」

心配した様子の側近が訪ねた

やはり、なにを言うこともなく、ぼうつとしている

気まずい雰囲気の流れ、女性達は、次々に席を立つ

「あの……今日はもうお暇いそさせていただきます」

「ルーシュベルト様もお疲れのようですし……」

焦り顔の側近

「えっ、あの……」

「それでは御機嫌よう」

部屋の壁に沿って立っていた側近達と共に、彼女たちは帰って行った部屋の中が静かになると、白髪混じりの側近、トレイシュが主に向かい合った

「これで、何回目ですか……」

ため息混じりに言うトレイシュの顔は、いつもより些かくたびれて  
いるようにも見える

「13回目だが」

悪びれる様子も無く、しれっと言葉を言い放つ

先ほどの集まりは食事会という名の見合いだったのだ

「貴方様の為、この国の為なのです」「いい加減にしてください、と、  
トレイシュはため息をつく

「国の為が、私の為になるのか」

漆黒の瞳は、トレイシュを鋭く

「ルーシュベルト様……」

トレイシュは、目を細めた

「少し、空気を吸ってくる」

「……………」

何も言うことの出来ない側近を背に、主は静かに部屋を後にした部屋を出たルーシュベルトは、外を歩いていた

暗闇の中を足早に歩いていく

入り組んだ森林は、彼の進路を邪魔するかのようだ

鳥の鳴き声や、葉のざわめく音が、不気味さを駆り立てる

どれくらい歩いたのだろうか……あんなに生い茂っていた木々が、拓けている場所が有る

やっと着いた

お目当ての場所

ルーシュベルトは嫌なことがあると、必ずここに来ていた

## 水面の女

後少しで、湖の辺ほとりに出るところだった

月に照らされた湖の中に、人影がある

(こんな時間に、何者だ)

ぱしゃり

ぱしゃり

右から左へと流れる波紋

今まで、誰にも会ったことが無いというのに

ぱしゃ

満月を背景に、現れる女の影

髪から滴る水は、涙を連想させる

月明かりに照らされて見える顔は、儚い一瞬、ルーシュベルトは、息をするのを忘れた



美しい

こんなに美しく、儂ひつげな女が居るとは

ルーシユベルトの体を、熱が駆け巡った

胸が、どきん、と、脈を打つ

まるで、自分の体では無いようだ

もっとよく見たくて

もっと近づきたくて

一歩、また一歩と、身を寄せていく

運命のイタズラなのか、運悪く枝を踏み、音を立ててしまった

惚けていたせいで、足元に気を配らなかつたせいだろう」「どなたかいらっしやるのですか」

玉のように美しく澄んだ声が、湖に響く

女は、一旦水の中に潜ると、こちらの方へ泳いできた

まずい、気づかれた

ルーシュベルトが焦っていることも知らずに、女は岸までやって来た

姿を見られる

「どなたか……」

大地を踏みしめる彼女の目に映るのは、木、木、木……

ルーシュベルトは、間一髪、大木の裏に隠れたのであった顔を少しだけ動かし、女を見る

月明かりに反射するプロント

女らしいくびれの曲線

さらなる胸の鼓動に、目眩を覚えた

彼女はというと  
いつまで経っても現れない人物を諦め、再び水面へ足を入れている  
ところであった

ひとまず安心したルーシュベルトは、今度こそバレぬように、女性  
へ背を向けゆっくりと立ち去る

ルーシュベルト知らなかった

水面の中から彼女がこちらを見ていることを

## 溝

城に戻ったルーシユベルトは、足早に廊下を歩く  
金の装飾を施された、立派で大きなドアを開き、自室に入る

まだ、胸の高鳴りは治まらない

帰宅途中の記憶がないほどである

(なんなんだ、この気持ちは)

未知の感覚に、頭をわしゃわしゃとかく

たまらなくなり、刺繍で彩られている豪華なベッドへダイブする

ルーシユベルトが一人でもがいていると、ためらいがちなノック音が部屋に響いた

ルーシユベルトは慌ててベッドから降り、ドアを開く

「……………」

その人物は、母であるイザベラであった

「ルーシユベルト、失礼しますよ」

美しい顔はいくら引きつり、怒りを懸命に抑えている様子が見て取れる

「貴方、また食事で失礼なことをしたようね」

射るような視線がルーシュベルトをとらえた

「興味のない者の話を聞けるほど、私は暇ではございません」

「なんですって……」

火に油を注ぐ言葉であった

「もう貴方は18になるのですよ！嫡男の貴方は将来王となり、妻を娶るのです！」

せきを切るようにイザベラは怒鳴った

すると、ルーシュベルトは肩を震わせながら笑い始めた

「なにがおかしいのです！」

笑うのをやめたルーシュベルトは、スツと睨むような顔をした

「やはり貴女は己のことしか考えられないようですね」

「何を……」

イザベラが怯んだ隙に、ルーシュベルトが言い返す

「自分ではなく愛人を可愛がる父は何時貴女を此処から追い出すか分からない。貴女の実家も力を無くし、父の役には立たない。だが、この座を追われたくはない……どうするか」

イザベラとルーシュベルトの視線が交差した

「息子である私を王にすれば、そうすれば邪険には扱われまい……と  
考え」「黙りなさい！」

「それ以上申すなら、ただじゃおきません！」

「貴女は私ではなく、己自信のことを」パァン！

左頬に感じる痛みと頭全体を襲う衝撃

イザベラはルーシュベルトを凄惨な形相で睨みつける

「やめて頂戴！いいですか、もう二度とこんなことは言わないでください！それから次回の食事会ではきちんとした対応をなさい！」

暫く睨み合い、言いたいことだけ言い残したイザベラは乱暴にドアを閉めて出ていった

「フン……哀れな女だ」

荒々しく椅子に腰掛けたルーシュベルトは、腕を組みながら目を瞑った

朝（前書き）

しばらくぶりで申し訳ありません。

朝

チュンチュン……

雀のさえずりと朝日がルーシユベルトを現実へ引き戻した

(朝……か)

雲一つ無い空に反して、ルーシユベルトの心は雨雲がかかったようにどんよりとしていた

タタタタタタタッ

どこからか人の足音らしき物音が近づいてくる

(またか)

ふう…と、溜め息をつきながら、ルーシユベルトは部屋のドアを開けた

「わあっ!」

同時に、驚いた声が部屋に響き、子供が入ってきた

いきなりドアを開けられたことにより、前のめりになるその子を、



ルーシュベルトは優しく抱き止めた

「おはようございます、兄様！」

にまっとな効果音が付きそうなほどの笑顔を向けてくるのは、ルーシュベルトの異母兄弟のイサルクである

ルーシュベルトとは対象的な金髪、深緑の瞳、可愛らしい表情  
血が繋がっているとは、到底思えないほどの違いだ

「兄様！お勉強教えてー」

お勉強というのは絵を描くことで、イサルクは政治関連のことについては全く興味がない

それでも、王位継承者第8位である

「少しは政治をやったらどうだ？」

やれやれ、といった感じでイサルクを見るルーシュベルト

「画材を持ってこい、中庭でデッサンをする」

「はい！ー！」

満面の笑みを浮かべたイサルクは、自分の部屋へと元気良く走っていった

「おやおや、元気な王子様なこと……」

声が出た方を見ると、開いたドアの隙間から、一人の若い女性が立っていた

「……………アレイサ……………だったか？」

うる覚えの名前を何とか絞り出したようだ

「あら、覚えていてくださったなんて光荣ですわ」

目元にあるホクロと、ぷつくりとした唇が妖艶なこの女は、父の6番目の愛人である

20歳になったばかりの彼女は、ルーシュベルトの父の愛人でありながらルーシュベルトを気に入っているらしく……………

ルーシュベルトが大人になるにつれ、何かと色仕掛けをしてくるようになった

「ねえ……………ルーシュベルト様、婚約者候補を選んでないみたいだけれど、どうしてなの？」

アレイサは、上目遣いで部屋に入ってくる

こちらの瞳を見つめながら、ルーシュベルトの胸を人差し指でなぞる

「誰か、良い人がいらっしやるのかしら……………？」

二人の視線が、混じり合った

「居ないのなら、わたしを選んでくださらない？嫌だったら愛人でもいいの」

ルーシュベルトは媚びを売る人間が嫌いだ

ただでさえ、アレイサのような香水臭い女が嫌いなのに、このようなことを言われては、ルーシュベルトの気分は最悪だ

「父の愛人であるお前が、なぜ私にそう言う」

「だって、貴方の方が美しいから……それに、あのお方はもう年でしょ？いつまでここに居られるか分からないし……」人差し指を顎に当てながら、唇を尖らせるアレイサ

そんなアレイサの考えに、ルーシュベルトは口を開いた

「お前のような愛人を持つ父が情けない、顔を見ていると反吐が出る、退け」

みるみるうちに力アッと顔を真っ赤にしたアレイサ

「何ですの！？貴男、わたしの誘いを断るなんて、女性に興味がないんじゃないかって？」

今まで男性を誘うことにおいては、百戦錬磨だったアレイサだが、ルーシュベルトには効き目がなかった

ふんつ、と、鼻で笑うと、ルーシュベルトを睨みつける

さっきまでの甘い雰囲気など微塵も感じられないほどの豹変ぶりである

「覚えてらっしゃい！貴男の顔に、泥を塗ってやるわー！」

激怒するアレイサを後目に、ルーシュベルトはデッサンを教えに中庭に向かう

後にルーシュベルトは、アレイサの言った言葉の真の意味を知ることとなる

朝（後書き）

またのお越しを！

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4103i/>

---

lily

2010年12月31日05時07分発行